

---

# 同じ空の下で

リカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同じ空の下で

### 【Nコード】

N6734I

### 【作者名】

リカ

### 【あらすじ】

まだ、中学校に慣れてなかった嘉穂<sup>カホ</sup>は、学校の中で迷子になっていた。

そんな時、一人の男子の先輩に出会った。ぶつかった時の、先輩の笑顔に一目惚れしてしまって　！？

## 0話：プロローグ（前書き）

初投稿です！

未熟者ですが、完結まで、楽しんで読んでもらえると嬉しいデス（

、  
、  
）  
／

## 0話：プロローグ

キツカケは、本当に些細な事。

まだ中学校にも慣れてなかった時。

どこに何の教室があるかもわからず、学校の中で迷子になっていた私は、泣きそうになっていた。

知らない先生や先輩ばかりとすれ違って、本当に怖かった。下駄箱がどこにあるかもわからなかった。

そんな時

バサッ！

廊下を走っていた、男子の先輩？とぶつかって、何を言ったらいいのか私はわからなかった。

すると、先輩が、

『あっ！ごめんね』

と、笑顔で言って、走り去ってしまった。

一瞬どきつとしてしまった私の背中から、私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「嘉穂カホ〜！」

この声は、小学校の時、仲が良かった綾音アヤネだ。

「ちよつとお！？嘉穂カホだったらどこ行ってたのよ！ここ三階さんかいじゃん！

一年生の教室は四階よんかい！！」

そう言われて、綾音に腕をグイグイ引つ張られて、私は何も言えなかった。

さっきの先輩？の事を考えていたから……。

「学校で迷子なんてありえないっしょ！中学生なのにいっしょ」

そう言いながら、綾音はまだ笑っている。

中学生になって、一週間が経った。

みんな中学校にも慣れてきているのに、私はまだ、小学生気分だった。

ま、身長も小学生並に小さいし……。

しょうがないよ！と毎日、自分に言い聞かせては、虚しくなっていた。

綾音は身長も高いし、可愛い。

髪の毛も、長くて綺麗な茶色だし、すっごいサラサラ。

中学校では、髪の毛が肩につくぐらいなら結ばなくても良いんだけど、長い人は結ばないといけない。

綾音は、髪の毛が胸のところまであるから、二つに結んでいる。

私は、肩につくかつかないぐらいの長さだから、結んでない。

そんな私と比べて、綾音は大人っぽくて、美人だし……。とても羨ましい。

「あつ、そっいえばさ」

綾音は、二時間目の国語の準備をしながら話はじめた。

「嘉穂は、部活何に入るの？」

国語辞典を最後に机に乗せると同時に聞いてきた。

「あー…どうしょお。綾音は何に入る？」

「まだ決めてないなあ。まあ、この一週間、仮入部できるから、楽しかったところに入るよ？」

綾音は急に明るい顔になった。

「私！二年の女子の隅田先輩に、卓球部に入りなよって誘われたんだあー。今日、仮入部の時に行くけど、嘉穂も来ない？」

隅田先輩とは、隅田小夏先輩の事。

卓球部に所属していて、優しく、明るくて、親しみやすい先輩！！卓球もうまいらしい！

「うん！行く行く！隅田先輩好きだし！」

「良かった〜ありがと〜」

そして、放課後！

「わあー！来てくれたのー？綾音ちゃんに嘉穂！」

隅田先輩が、私達に手をふりながら、駆け寄ってきた。

「来てくれてありがと！仮入部の子は、一回荷物をはじっこに寄せて！」

そう指示されて、スクールバックをはじっこに移動させようとしたその時

今日、ぶつかった、男子の先輩がいた。

チリーチリーンッ！！！！

「だあーもあーうるさい！！」

咄嗟に手が、目覚まし時計にのびて、うるさく鳴っていた時計が静まった。

久しぶりに、中学一年生になったばかりの夢を見た。

「もうこんな時間！？朝練間に合わない〜！！」

あれから時間も経ち、季節は冬。

もう少しで、一年生が終わる。

私は結局、あの男子の先輩とは話さないまま、卓球部に入部した。

あの男子の先輩の名前は、桑野凌クワノリョウというらしい。

「あーっ！！まじで遅れるー！」

ベットを飛び出して、制服に着替えながら、桑野先輩に会える事に喜んでいる自分にきづいた。

そう。

どうやら私は、桑野先輩を好きになってしまったのです！

## 0話：プロローグ（後書き）

『同じ空の下』を読んでくださり、ありがとうございます。  
なるべく早く、続きを投稿しますので、二話目も読んでくださると  
嬉しいです。



## 1話：かるく自己紹介

私の名前は、小沢嘉穂。オザワカホ

中学一年生。卓球部所属。

久しぶりに、春頃の夢を見たからか、頭が痛い。

今の季節は冬。

部活にも学校にも慣れた私は、学校の中で迷子になる事はなくなつた。

新しい友達もできて、毎日楽しい。

それに……好きな人もできたし！！

朝練は七時半から。

ただいまの時刻は……七時。

家から学校まで、徒歩十分。結構近いのだ。

だけど、何の準備もしていないから、ほぼ確実に、朝練に間に合わない。

これから、顔を洗って、ご飯を食べて、着替えて、髪の毛結んで、歯磨きして、トイレに行つて……その他色々やることがあるし！間に合わないっしょ！？的な事を、心の中で叫びながら、とりあえず洗面所に向かった。

私は、一軒家に住んでいて、私の部屋は二階。洗面所は、一階にある。台所を出て、廊下を真っすぐ進んだ所にある。

慌ただしく階段を降りて、洗面所まで、冷たい足を走らせた。

洗面所に着いたら、タオルを取り出し、暖かいお湯で顔を洗い、タオルで顔を拭きながらリビングに行く。

リビングには、高校一年生の姉と、小学五年生の妹がいた。姉の名前は、美穂。ミホ 短い髪の毛を、金髪に染めて、ギャルっぽくなっている。学校でも、よく問題を起こして、最近では、ずっと学校をさぼっている。不真面目なんだ。妹の名前は莉穂。リホ 莉穂は、髪の毛が、元から茶色くて綺麗。目を大きくて、お人形さんみたいで可愛

い。莉穂も、ちょっと不真面目で、明るいのが良いんだけど、明るすぎて、学校で、結構目立っている子。私だけ地味……。

「おはよー嘉穂。今日、さっちゃんが夜来るってよー」

姉が、メイクをしながら言った。

さっちゃんとは、うちのお母さんの妹。私達が信賴している人。私のお母さんは、お父さんと離婚して、お父さんと姉と莉穂と私の四人で暮らしている。お母さんは、色んな男の人と浮気していて、結局離婚しちゃって、出ていってしまった。

何故か、お母さんの妹の、咲ちゃんサクは、お父さんと私達の事を気に入って、よく遊びに来ている。私達も、咲ちゃんの事、大好きなんだ。ちなみに、咲ちゃんのあだ名はさっちゃん。

「そうなんだあ……」

適当に相づちをうつって、テーブルの上にあるココアを、ちびちび飲み始めた。

妹の莉穂は、テレビを見ながら、ココアを飲んでいた。

姉は相変わらず、メイクしている。

「てかあー、嘉穂、早く学校行きなよあー。遅刻じゃね？」

姉の美穂は、メイク道具を片付けながら、話しだした。

「知ってるよあ！もう走って行くから良いし！」

ココアを飲みながら、制服に着替えた。

「じゃあさー？アタシが自転車で学校まで送ってくよあ。五分ぐらいで着くよー？」

「えっ！？送ってくれるの!？」

危うく、ココアをこぼす所だった。危ない危ない……。

「うん。だって、中学校の裏門で、彼氏と待ち合わせしてるしー。

今日だけ特別に乗せてくよあ？」

「ほっ！ほっ！ほんと!？めっちゃ助かる！ありがとあ!!!」

「いいから準備はばっとしてよあ！」

返事の代わりに、ピースをして、階段を上がった。

スクールバックを肩にかけながら、髪の毛を結ぶ。

いつもなら二つ結びだけど、時間がないので今日は一つ結び。それから洗面所に向かい、歯磨きをして、リビングに再び参上！  
「よおーし！じゃー、莉穂。アタシ嘉穂と行くから。学校行くときは鍵閉めなよおー？」  
姉は、妹の返事を待たずに外を出て、黄色い自転車の座席に、パンパンと軽く叩いて座った。  
座席の後ろに、私は座って、自転車がキコキコ走り始めた。

ガラッ

体育館には、まだ人があまりいない。  
現在の時刻、七時二十三分。  
ぎりぎり間に合った。

「あつ！おはよお〜嘉穂！」

隅田小夏先輩が、優しい笑みを浮かべながら、私の方に来た。

今日も、二つに結んだ髪型が可愛いなあと思いつつ、挨拶して返した。

「おはようございます。まだ人、少ないですね〜」

「だねー。あ、そうそう。伝えとかなきゃいけない事があるんだあ！」

と言いつつ、隅田先輩は、自分のジャージのポケットから、一枚の紙を出して、私に差し出した。

招待状って書いてあるけど…？

「あのねー！卓球部では、この季節ぐらいになると、毎年、『男子卓球部と、女子卓球部で交流を深めよう！』ってというのがあって、休日に、遊園地に行ったり、旅行に行ったりするんだ。で、今年はクリスマスパーティーをしよう！事になったんだ。それで、今回は特別に、夜になったら綺麗なイルミネーションが見られるホテルに

停まる事になったの！」

明るい声で、隅田先輩は話をすすめる。

「昼間は、ホテルの近くに遊園地があるから、そこで遊んで、夜は、イルミネーションを見ながら騒ぐの！来週の日曜と月曜に行こうよ！一泊二日！来週の月曜日、創立記念日で休みだし！……ダメかな？」

「あつ……はい。大丈夫ですよ。毎日暇だし！おもしろそうですね！」

隅田先輩は、コクコク頷いた。

「でしょ！？……実はあく私、卓球部に好きな子がいるんだあ……。一年の子だけど」

隅田先輩の声が、急に低くなった。

「だからね……！そのクリスマスパーティーを使って、告白したいの……！」

「えっ？あつ？えっ！？」

「だから……！嘉穂！今週の土曜日、買い物に付き合ってくれない？可愛い服とか買いたい！あと、クリスマスプレゼントも欲しいし……！」

隅田先輩は、ペコペコ頭を下げてるし、断れないよ……。

「ありがと！じゃ！またあとで！」

言いたい事を言って、立ち去ってしまった。

てか、好きな人、誰だか聞いてないし！

……でも、告白かあ……！

そうだ……！

私も、クリスマスパーティーを使って、桑野先輩との距離を縮めよう！

やる気でできたぞおー！

## 2：なんでこうなるかなあ

一時間目の体育が終わり、綾音と一緒に、のろのろと廊下を歩いていった。

朝練の時は、あれつきり隅田先輩とは話さなかった。

綾音に、クリスマスパーティーの事を話したら、いつもの調子でげらげら笑っていた。

『まだ11月なのにクリスマスパーティーとか!!』

と、朝練の時に、大声で言うから、男子の先輩に睨まれたっぽい…。

綾音が、水道の水をゴクゴク飲み始めたので、適当に周りを見てみると、隅田先輩がこちらに手を振っていた。振り返すと、笑顔で駆け寄ってきた。

「嘉穂！それに綾音ちゃん！体育の帰り？」

声をかけられて、綾音が水を飲むのをやめた。

「あつ、ハイ！」

綾音が私のかわりに答えたので、私は頷いて見せた。

隅田先輩は、へエ〜と言いながら、ニコニコしていた。

「あれっ？先輩、超ニコニコしてますねー！」

綾音がそう言うと、さらに顔を輝かせて見せた。

「うん！！ちよつとね」

と言って、私にウインクをして見せた。

私も、ウインクして返す。

「じゃあ！午後練の時に会おうねー!!」

と言って、教室に戻っていつてしまった。

それから無言で歩きます。

沈黙を破るように、綾音が話し始めた。

「嘉穂と隅田先輩って、仲良いね…」

「そう？綾音だって仲良いじゃん」

明るく切り返すと、睨むように綾音が顔を向けた。

「……でも、隅田先輩、私の事はちゃん付けで、嘉穂の事は呼び捨てじゃん……？……いいなって思ってた」

「そんな事ないけど……」

困ったように返事をすると、綾音が目の前に立った。

「嘉穂つてさ、誰にでもいい顔しちゃってるから好かれるんだろうけど、私、嘉穂のそーゆーところ、嫌いだから」

宣言するように綾音が言って、そのまま行ってしまった。

3：頼もしい仲間 綾音との遭遇！？（前書き）

更新遅れてすみません><

風邪をひいて寝込んでいたので遅れてしまいました！！

### 3：頼もしい仲間 綾音との遭遇！？

全ての授業を終え、帰りの挨拶をした後、みんな様々な行動をとっていた。

私は、綾音に声をかけようと思ったが、やめた。

あの後から、綾音に避けられっぱなし。

声を掛けようとしてみても逃げちゃうし…。

隅田先輩に相談しようかな……。

綾音の事を考えながら、廊下に出ると、誰かが肩に手を置いた。

振り返ると、同じクラスの井上太一と、寺山愛と、イノウエタイチ 鳴倉留衣テラヤマメグミがいた。

「なーに暗い顔してんだよ！具合悪いのかー？」

「バカだねー たっちゃん！嘉穂リンはきつと、恋したんだよ！その事について悩んでるんだよ！」

「どちらも違うと思うけど？」

最初の声は男子の太一。あだ名は『たっちゃん』。クラスの人気者。誰にでも優しく面白くてかっこいいから、誰からも好かれている。短く刈った、茶色の髪の毛が目立つ。

太一の次の声が愛。クラスの女子 いや、一年の女子の中で一番うるさくて、一番頭が良い子。顔も可愛いし、二つ結びにしている髪も、さきつばに軽くカールがかかっついていて可愛い。人一倍うるさくて目立つから、その可愛さは台無し。でも、友達を大切にしている子らしい。

最後の声は鳴倉さん。一年女子で一番目立たない子。愛の次に頭が良くて、真面目な子。生徒会副会長にもなっていて、しかも学級委員長で、一年の代表を任されている。真面目すぎて、近寄りがたい子だけれど、生徒会副会長という立場の力を発揮させ、『肩までつく髪なら降ろして良いけれど、それ以上長い人はダメ』という校則を、『髪が胸までついてても、降ろして良い。ただし、体育の時、または体を動かす時は、結ぶ』という校則に塗り替えた。しかも、『



女子のスカート丈は、膝より上は禁止。膝ぎりぎりも禁止』という校則を、『女子のスカート丈は、膝辺りまでつく靴下ならば、スカートを膝より上にして良し。ただし、スカートの下にはいている体育が見える程、高くしない』という校則にも塗り替えた。

だから、女子にも強い信頼と、好感をもたれて、女子にとって、憧れの存在。

男子は、『クールでかっこよくて、何でも完璧に遣り遂げられる、お姉様』という存在になっていた。

何故なら、授業中に、男子がふざけていて、窓のガラスを割ってしまい、先生に怒られそうになった時、先生に事の全てを話し、先生を納得させてしまい、窓ガラスの弁償金は、一年生徒の代表として自分が払うと言って、本当に自分で払ったのだった。更に、男子達が不満に思っている校則をかえてしまったのだった。その不満に思っている校則とは、『学校に必要なものを持ってこない。携帯・お菓子類など』という校則を、『お菓子は、口の中をスッキリさせる時のために、ガム・飴を許可する。ただし、飴はのど飴に限る。授業中には食べない。携帯は、家族への緊急連絡や、先生方への急な用事の場合の時だけならば、使う事を許可する』という校則をつくった。ここまで校則を作り替えられると、人間とは思えなくなってくる。

この意見には、無論教師達も黙っていないかった。

『携帯なんて別のことに使うに決まっている！もし携帯を学校で悪用したら、どう責任をとるつもりだ！？』

という教師の意見を、

『責任をとるのは、この校則を認める貴方達がとるべきです。それに、携帯がなくては不便利な人もいます。親にどうしても連絡しなくてはならない事もありますし』

『そ……そうだけど……！！連絡しなくては行けない時には、職員室ですれば良いじゃないか！』

『職員室に行つて、親に連絡をしなきゃいけないと言って、連絡さ

せますか？私の身近な人で、連絡させてもらえなくて困ったと聞き  
ましたけど」

『それはしかし……』

『携帯・お菓子類を持って来ても、近所に飴玉の袋は捨てなければ  
迷惑にならないし、生徒はこの良さを色んな人に伝えるでしょう。

来年入ってくる新入生が耳を挟めば、噂は広がります。学校の評判  
は上がるし、一度来てみたいと言う人も出るはずですよ』

『だが……』

『携帯の悪用はできないように、生徒会からも気を付けます。授業  
中には、先生方がしっかりしていれば、悪用はないはずですよ。あま  
り、あれこれダメダメ言ってるから、生徒は反抗したくなるんです  
よ』

『そこまで言うなら、一週間だけ、やってみよう』  
という結論に出た。

その一週間、平和だったため、携帯・お菓子類許可となった。  
そんな超人が目の前にいる。

「で！嘉穂リンどーしたのお？」

愛が心配そうに聞いてきた。

「あ……何も無いよ！本当に！」

「綾音と何かあったのね？いつも二人でいるのに、今日は、様子  
が違うし」

太一は、目を見開き、愛は、ほおー！と言っている。

「俺たちが相談にのるぞ？嘉穂！顔くれーし、心配だよ」

太一の言葉に、愛と鳴倉さんも頷く。

「ってーかあ！太一は嘉穂リンの事が気に」

太一が、すごい勢いで愛の口を、手でおさえた。

愛はジタバタ暴れていて、鳴倉さんはため息をついた。

「本当に心配だし、帰りに話を聞いわ。下校時刻も早まっているし、  
部活もミーティングだけで終わるわ。正門で待ってるから、帰り一  
緒に帰りましょう。話も聞いてあげたいし」

鳴倉さんは淡々と行って、そのまま歩きだした。

「じゃ、あとでねー！」

そう行って、太一と愛も行ってしまった。

太一はサッカー部。愛はバスケット部。鳴倉さんは茶道部。

みんなそれぞれ違う。

私も、ゆっくり歩き始めた。

ミーティングが終わり、帰ろうとすると、隅田先輩がこちらに駆け寄ってきた。

「嘉穂！土曜日、野原公園に十時ね！忘れちゃだめだよ！」

と、人懐っこい笑みを浮かべて行ってしまった。

私も正門に急ぐ。

正門には、もう三人とも来ていた。

「おー！来た来た！じゃーしゅっぱーつ！」

と愛は言って、ずんずん歩きだしてしまった。

私達も渋々ついて行く。

「……でさ、どうしたんだよ？嘉穂」

太一が話を切り出した。

私は、今日の出来事を、簡潔に述べた。

太一と鳴倉さんは黙って聞いていた。愛は色々な動作をしながら聞いていた。

一通り話終わると、鳴倉さんはため息をもらした。

「ふうん……。ただの嫉妬じゃないの？放っておけば？」

太一は首をひねり、愛はめずらしく真剣な顔をしていた。鳴倉さんは表情が読めない。

「うーん……。嘉穂リンはどうしたいのー？」

「私は……仲直りしたいけど避けられるし、どうしたらいいのかわかんない」

「岸田（綾音の名字）の気持ちがおさまるまで待てば？」

「それがいいかもね…… あ、小沢さん、家そっち？私と愛は

真っすぐ行くけど」

ちようど、道が二つに別れていた。

私は、曲がらないと帰れないので頷いた。

太一も私と同じ方向なので、一緒に帰ることになった。

愛と鳴倉さんに別れの挨拶を告げて、歩き始めた。

「嘉穂、困った事があったら、言えよ？」

急に言われたので、あわてて頷いた。

「頼むぜ？俺、嘉穂のこと」

「何してるの？」

声のほうに振り向くと、綾音が立っていた。

#### 4：衝撃の真実！！？（と言ってもそこまで衝撃じゃありませんね、ハイ）

「あ……綾音……！？」

「……二人とも付き合ってたんの？」

綾音は、無表情だが、声が低く、とても怖い。

一瞬、息を飲んでしまう程。

「ちげーよ。帰る方向が同じだけだ」

太一はゆつくり歩きながら喋った。

「俺、先帰るわ。じゃな」

と言って、行ってしまった。

なんだか気まずい……。

話し掛けたほうが良いのかな？

でも、なんか怖いし……。

すると、綾音が沈黙を破った。

「……ねえ、たちちゃんと付き合ってるの……？」

綾音が、恐る恐る聞いてきた。

「うええっ！？ないない！！私！他に好きな人いるしっつっ！！」

なぜか慌ててしまい、口もすべってうっかり好きな人がいるという事まで言ってしまった。

綾音はすごく驚いて、私の肩に、手をおいて、私の体をゆすった。

「好きな人いんの！？あの嘉穂に！？誰よ！！！！」

綾音の目はとても興奮していて怖かった。

「え……え……誰にも言わない？」

「言わない言わない！！何百万もらって頭下げられても言わない」

いや、私の好きな人知りたいだけで、何百万も払って頭を下げる奴なんかいないっしょ……。

「んーと……。卓球部の先輩の桑野先輩が好きなんだ」

と言うと、綾音は目を丸くした。

すると、綾音は深呼吸した。

「あのさ……私はさ……たっちゃんの事が好きなんだ」  
えええっ!?!?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6734i/>

---

同じ空の下で

2010年10月10日05時35分発行